DOR-0121

ANNE MURRAY/YOU NEEDED ME

愛する人々に贈る永遠の恋人アン・マレーの愛のメッセージ!!

辛い別れ／アン・マレー

●SIDE 1	1. 愛の香り	*LET'S KEEP IT THAT WAY*	3′30″
	2. 寂しい日々	*WALK RIGHT BACK*	2′40″
	3. 愛がすべて	*JUST TO FEEL THIS LOVE FROM YOU*	3′06″
	4. ひとりの部屋	*WE DON'T MAKE LOVE ANYMORE*	3′51″
●SIDE 2	1. 辛い別れ	*YOU NEEDED ME*	3′38″
	2. あなたとともに	*YOU'RE A PART OF ME*	3′23″
	3. 強く抱いて	*HOLD ME TIGHT*	2′42″
	4. テネシー・ワルツ	*TENNESSEE WALTZ*	2′46″

〔歌〕アン・マレー　〔プロデュース〕ジム・エド・ノーマン

制作にあたって

日頃は第一家庭電器をご愛顧頂きまして誠にありがとうございます。

前回の「伊藤咲子・中原めいこ76／45」に続いて今回もオーディオ・チェックレコードとして聞いて楽しく、チェックしやすい女性ボーカルを制作いたしました。

ボーカルのレコードは今までに、グラシェラ・スサーナ、アリス、弘田三枝子、そして前回の伊藤咲子・中原めいこといずれも76／45のオリジナル録音や東芝EMI原盤を使用してきました。DAM45として外国原盤はクラシック・シリーズのカラヤン－ベルリン・フィルなど数多くの超大物が登場していますが、ポピュラーやロックの洋楽アーティストは一度も登場しておりません。

と言うより、ポピュラーやロックのアーティストは、まったく不可能なビートルズを始め、契約条件等むずかしい問題が山積で到底企画できる状態ではありませんでした。今回は東芝EMIの絶大なご協力で、不可能を可能にと挑戦してもらいました。それも、現在アメリカではば広い層にもっとも人気があり、その歌唱力は3度のグラミー賞受賞で実証済の超ビッグ・アーティスト、アン・マレーです。

アン・マレーは、1970年のデビュー曲の「スノーバード」がその年のグラミー賞の最優秀歌曲賞を受賞し、その後も74年には「ラヴ・ソング」でグラミー賞の最優秀C＆W女性歌唱賞を、更に78年には、〈辛い別れ〉で最優秀ポップス女性歌唱賞を受賞している実力派のビッグ・スターで、カントリー＆ウエスタンからポップス、スローバラードまで独自のアン・マレー節で心あたたまるボーカルを楽しませてくれるシンガーです。

そのアン・マレーの数多いアルバムの中より、彼女のビッグ・ヒットである〈辛い別れ〉の入ったECS-80995〈愛の香り〉より8曲を、キャピトル原盤のマスターテープの持味を生かすため、イコライザーをぬいて、アン・マレーのボーカルを中心に45回転ハイ・レベル、ストレート・カッティングしました。

録音はシンプルで不自然さのないオーソドックスなもので、定位感、バランスともにしっかりとしたもので好感が持てる内容です。

バックの演奏もいずれも実力派ぞろいで、アン・マレーのボーカルをもりたてた好演です。

DAM45シリーズの中にも、今までなかった本格派の大人のムードの女性ボーカルの醍醐味をじっくりと味わっていただけるだけの内容にしあがったと思います。

なおこのアルバムの制作にあたり、関係各位の皆様に多大なご協力をいただきましたことを心よりお礼申し上げます。

最後に、このレコードが会員の皆様に、末長くオーディオ・チェック等にご使用いただき、愛聴盤の一枚に加えていただけたら幸いです。

DAM推進委員会

ANNE M

プロ・ミュージシャンを志す多くの若者達にとってアメリカのレコード・マーケットでいかに大きく、印象深い第一歩を踏み出すかが全てに共通した成功への大きなポイントである。無論、才能や運も重要な要素ではあるが、成功への不可欠な条件として、アメリカのレコード・マーケットがその背景にある。

なぜならば、今日いかにロック／ポップスが国際的な、若者共通音楽として普及したとはいえ、その世界への飛躍舞台、窓口となっているのは依然アメリカだからだ。アメリカは現代に至るロック／ポップスを生み、育てた老舗というばかりでなく、どの国よりも多くの聴き手やそうした音楽活動の場に恵まれ、かつレコード・セールスでも群を抜いている。

流行を作り出す能力に優れ、またとても敏感である反面、ファンも耳がこえているので並の音楽には見向きもしない、というきわめて厳しい反応を示すことも少なくない。

さすがショウ・ビジネスの本場、との看板を背負っているアメリカだけに、国の内外を問わず、全てのポピュラー・ミュージシャンにとって一人前のプロとして認められるか、否かはここでの成功の是非にかかってくる。

どんなにヨーロッパで人気があっても、アメリカのポピュラー・マーケットに進出し、実力を発揮できなければ、しょせんローカル・スターでしかない。このことは過去数多くのポピュラー・アーティストの成功例をひきあいに出すまでもなく、音楽史に印された記録が如実に物語っている。

ビートルズ、サイモン＆ガーファンクル、アバ、ビリー・ジョエルなどのビッグ・スターも例外ではない。とりわけアメリカ以外の国のアーティスト達にとって、そこでの成功はきわめて難しく、また音楽人生を左右する意義深いこととなる。そういえば、1974年春、イギリスはマンチェスター大学で、デビュー早々のクィーンに会った時、彼らも直前に控えたアメリカン・ツアーへの不安、そして意欲を語っていたことが印象深かった。

現代ではリトル・リバー・バンド、リック・スプリングフィールド、メン・アット・ワーク、エア・サプライ、ムーヴィング・ピクチャーズなど、古くはオリビア・ニュートン・ジョンやビー・ジーズといった人気アーティストを送り出し、低迷状況のポピュラー・ミュージック界に新風を吹き込んでいるオーストラリア勢も、アメリカのレコード・マーケットでのヒット、成功が大きくものをいっている。

ロック／ポップスが現代ではいかにインターナショナルなものになったとはいえ、レコード・マーケットの中心はアメリカ、これは1950年代ロックン・ロール時代から今日に至るまでなんら変化はない。

そしてこの大きく、かつ厳しいフルイを通して、多くの音楽ファンはアメリカはもとより、南米、ヨーロッパ、イギリス、日本など、色彩豊かなロック／ポップスを知る機会に恵まれた。

本アルバム・アーティスト、アン・マレーを送り出したカナダのポピュラー・ミュージックを知るきっかけもアメリカでの動きで、という音楽ファンも少なくないだろう。

カナダのポピュラー・ミュージックのアメリカ進出といえば、その歴史はイギリスや現在注目のオーストラリアより古く、1950年代にはポール・アンカを、その後はゴードン・ライトフット、ブルース・コックバーンやマレー・マクロクラン、ジョニ・ミッチェルなどフォーク系シンガー・ソングライターを、またザ・バンドやニール・ヤング、更に現在はサーガ、ラッシュ、エイプリル・ワイン、アルド・ノヴァ、ラヴァーボーイ、プリズム、ブライアン・アダムス、トライアンフ、パット・トラヴァース、ダンヒル、ハートなど、質量ともに揃っている。

音の傾向としては、ハードでソリッドなロック、ロックン・ロールが近年の主流となっているが、ポップスや伝統的な流れをくんだシンプルなアコースティック・サウンド、即ちフォーク色の濃い音楽にもまだまだ棄てがたい魅力を発見できる。

しかしながら、一般に我々多くの日本人がカナダという土地から抱くイメージは、けばけばしく彩られ、騒音に満ちた近代的な都会というよりは、荒涼とした雄大な自然美と大陸的でおおらかな人間性を思い浮かべずにはいられない。

そしてこうしたイメージと見事にオーバーラップする音楽といえば、やはり力強く、エレクトリックなパワーあふれるサウンドよりも、弾力的で水々しく、かつ繊細さをあわせもった人間臭いサウンドを無意識のうちに描いてしまうのである。

“全米で初の100万枚レコード・セールスを記録したカナダ出身の女性歌手”はたまたお口の恋人ならぬ“カナダの歌う恋人”といった形容で必ず紹介されるアン・マレー、彼女はまさにカナダのイメージをその作品のなかに彷彿とさせるアーティストの代表格である。

アン・マレーは1947年(他に45、46年説もある)6月20日、カナダのノヴァ・スコティア、スプリングヒルで生まれた。6人兄弟の紅一点として育てられた彼女は、幼い頃からピアノを習い、15歳から後3年間は歌のレッスンを受けるという大変音楽環境に恵まれていた。しかしながらプロ・ミュージシャンの経歴に多々見受けられるような、学業終了後即プロ歌手との道を歩まなかった点がなんともユニークなところ。

ホリファクスのヴィンセント・カレッジからニュー・ブランズウィックの大学へと進んだ彼女は、そこで物理学を専攻した。そして卒業後はプリンス・エドワード・アイランドのハイスクールで、物理学教師の職につく。とここまではしごく一般的な人生であるが、元来歌うことは人一倍好き、しかも音楽に恵まれた環境に育ち、かつ才能も人並み以上のものを持ちあわせていたことが、その後の彼女の人生を大きく塗りかえることになる。

教師からプロ歌手へと180度の転換、なにが原因かといえば、やはり平凡な人生にあきたらず、いや！それより歌が好きだったからだろう。とにかく教職についた彼女、あの日突然、以前から意識の片隅にねむっていたショウ・ビジネス界への興味、関心がムクムクと頭を持たげ出した。どうせ人間の一生なんて短かいもの、自分をかけてみる価値あり、と思ったかどうか、とにかく矢もたてもたまらずに職を棄て、再出発、クラブ歌手へと第一歩を踏み出す。

かつて、大学在学中の1960年代半ば、彼女は夏休み期間中、ホリファクスのテレビ・ショウ〈Sing Along Jubilee〉の歌手オーディションを受けている。結果は不運にも不採用だったが、この時知り合った2人のディレクター、ビル・ラングストローズとブライアン・エイハーンは彼女にとってその後の公私共欠けがえのない人物となる。

ビルは現アン・マレーの夫(1975年に結婚)、片やブライアンはレコーディング歌手となった彼女の、1974年発表のアルバム『Highly Prized Possession』までの専属プロデューサーとして尽力している。

クラブ歌手として人生再出発した彼女は、カナダの東地区を中心に活動、ＣＢＣテレビのローカル・ショウ番組〈Let's Go〉などにも出演、徐々にではあるがその名を知られるようになっていく。

1969年、この年はアン・マレーにとって重要な、一生忘れられない時となる。まず、かつてオーディション不合格となったテレビ・ショウ〈Sing Along Jubilee〉のレギュラー歌手として迎えられ、更にカナダのＡＲＣレコードで初のレコーディング・チャンスにも恵まれる。彼女にとって初のレコーディングはアルバム『What About Me』で、この作品が発売後アメリカのメジャー・レーベル、キャピトルの注目するところとなり、すぐさま専属歌手契約の話にまで発展する。

こうしてカナダのマイナー歌手からいち躍、メジャー・レコードのキャピトルに迎えられたアン・マレーは1969年11月にアメリカ・デビュー、翌1970年夏には同郷のシンガー・ソングライター、ジーン・マクレランの作った『Snowbird』が彼女初のシングル・ビッグ・ヒットとして記録された。

幸先の良いアメリカ・デビューを飾った彼女は1970年10月、人気歌手、グレン・キャンベルのテレビ・ショウ〈Good Time Hour〉に以後1973年までの間に8回出演、その間に『Sing High Sing Low』、『Talk It Over In The Morning』、『Cotton Jenny』、『Danny's Song』、『What About Me』、『Send A Little Love My Way』、『Love Song』とシングル・ヒットを次々書き加えていく。

また一方では、グレン・キャンベルとのイレギュラー・デュエットを組み、1971年にアルバム『Anne Murray/Glen Campbell』(Capitol 869)を、シングル『I Say A Little Prayer/By The Time I Get To Phoenix』を発表、ヒットさせている。

デビュー当初はジョン・セバスチャン、ボブ・ディラン、エリック・アンダーソンなど、主としてシンガー・ソングライターの作品を歌い、カントリー歌手とのイメージで音楽ファンにアピールされたが、1973年のアルバム『Danny's Song』あたりから、そうした特定の音楽ジャンル・スタイルから脱皮、よりポップな女性歌手として、取り上げる曲にも広くバラエティなものが多くなっていった。

1973年黒人女性歌手のロバータ・フラッグで全米第1位となった『Killing Me Softly With His Song』、1963年ドリス・トロイでヒットした『Just One Look』、ビートルズ・ナンバーの『You Won't See Me』や『Day Tripper』、1959年ボビー・ダーリンのビッグ・ヒット『Dream Lover』などがそれだ。

日本ではほぼこの頃と時を同じくして、同じキャピトルの女性ポップ歌手、ヘレン・レディと共に彼女が脚光を集めていた。

アメリカでは徐々にではあるが、彼女のイメージ・チェンジは着々と効果をあげ、レコードを発表すればポップス、カントリーの両ヒット・チャートに必ずランクされるというまでに安定した人気を保った。

しかしながら、コンスタントに年1～3曲のヒットを発表するとはいうものの、彼女にとってもうひとつふっきれないものが残った。それは人気こそ平均しているものの、これという決定作に恵まれていないことである。従ってレコーディング歌手となり、そこそこの成功を得られたものの、代表作は常にデビュー当初の『Snowbird』であり、それは彼女の飛躍に大きな壁となっていた。

1976年には出産のため音楽活動はセミ・リタイアーとなり、レコードよりテレビでの仕事に時間が費やされるようにする。

レコードもマイ・ペースで発表され、可も不可もない結果を残すが、デビュー当初に比べ精彩を欠いた時代が1970年代後半。この時代に彼女は次のアルバム作りの構想、制作に時間をかけていた。1977年早々、トロントのレコーディング・スタジオに入り、半年あるいはそれ以上のかつてない腰のすわったアルバム制作を行なった。それが『Let's Keep It That Way』(本作品・You Needed Me)である。1977年9月に全米で発売され、翌78年にはアルバム・プロモーションをかねて、ナッシュビルのグランド・オル・オープリーをスタートに約3ケ月のアメリカン・ツアーが始まった。

『Let's Keep It That Way』は発売当初、アメリカでも異例なくらいに反応が鈍く、アン・マレーの作品としては思うような良い結果をあげることはできなかった。それもそのはずである。従来のアン・マレーのレコードにしてはあまりにも地味で、大人っぽい印象に統一されていたからだ。しかし、反面では安定感のあるソフトでメロディアスなポップス、くいつきは遅くとも回数を重ねるごとに味わいのあるポップなバラード集との今までにない彼女の、ヴォーカリストとしての魅力がいかんなく発揮されたものであった。

発売から約1年3ケ月、実にしんぼう強く息の長いプロモーションの成果は、地味といわれた本作品を一転して彼女の、そして当時のポピュラー・アルバムのベスト・レコードにまで押しあげた。アルバムのシングル・ナンバー『You Needed Me』のビッグ・ヒットがその重要な役割を果たした。

この『You Needed Me』のヒットは、またデビュー以来彼女の代表傑作とされていた『Snowbird』にとってかわり、ポップ・カントリー歌手イメージをも塗りかえた。以後発表されたアン・マレーのアルバム、『New Kind Of Feeling』と『I'll Always Love You』(1979年)『Somebody's Waiting』(1980年)～『Where Do You Go When You Dream』(1981年)～『The Hottest Night Of The Year』(1982年)の作品を聞けば一目瞭然である。

メロディアスなポップ・バラードを中心に歌いあげ、安定したソフトで美しく、物腰のやわらかいヴォーカルを展開する。これが現代のアン・マレーのセールス・ポイントである。

ちなみに現在まで発表されているアン・マレーの全アルバムは次の通り。

1969 This Way Is My Way (カナダでの1作目)
　　Honey, Wheat And Laughter (同2作目)
1970 Snowbird (アメリカ・デビュー作)
1971 Anne Murray
　　Talk It Over In The Morning
　　Anne Murray And Glen Campbell
1972 Annie
1973 Danny's Song
1974 Love Song
　　Highly Prized Possession
1975 Together
1976 Keeping In Touch
1977 There's A Hippo In My Tub
1978 Let's Keep It That Way
1979 New Kind Of Feeling
　　I'll Always Love You
1980 A Country Collection
　　Somebody's Waiting
　　Greatest Hits
1981 Where Do You Go When You Dream
　　Christmas Wishes
1982 The Hottest Night Of The Year

1974年には〈最優秀カントリー＆ウェスタン女性ヴォーカリスト〉、1978年には『You Needed Me』で念願の〈最優秀ポップス女性ヴォーカリスト〉、翌年も同賞、と3度にわたってポピュラー・ミュージック界最高の栄誉であるグラミー賞を受け、今や女性ヴォーカリストとしてはトップ、円熟期にあたるアン・マレー。本作品はその彼女の魅力が余すところなく発揮された傑作中の傑作、1970年代のポピュラー・ミュージック史に残るアルバムである。

プロデュースは前作『Keeping Touch』(1976年)までの、彼女のアルバム2作を手がけたトム・カタラノに代ってジム・エド・ノーマン(以後1982年までのアン・マレー・アルバム8枚、ただし『Greatest……』は一部)が担当している。

●Side 1

1．愛の香り

テネシー出身のシンガー・ソングライター、ＭＣＡから1980年にレコード・デビューしたレイフ・ヴァンホイとカーリー・プットマンのペンになる曲。

うれいを含んだハスキーなソフト・ヴォイス、やさしく語りかけるようなアンの歌がひときわ光るスローなポップ・ナンバー。

2．寂しい日々

ソニー・カーティスが1960年に作り、翌61年にエヴァリー・ブラザーズの歌でベスト・セラーを記録した作品。

シャキッとした歯切れのよい調子、のりのよさが魅力の親しみやすいポップス。

3．愛がすべて

ジャッキー・デシャノンとディーン・マクドゥガルの作で、ジャッキー自身1977年にアムハースト・レコードから発表した曲。

安息感にみちたメロディ、しっとりと歌い込まれたアン・マレーならではの快い味付けがにくい作品。

4．ひとりの部屋

男性ポップ歌手の第1人者、ケニー・ロジャースがM.ゴードンと組んで作り、1977年発表の、自らのアルバム『Daytime Friends』に収録した作品。

緑の新鮮な匂いが鼻をくすぐる、ぬくもりを含んだ風がほほをなでる、そんな感じを伝えるソフトでラヴリィな落ち着いたメロディアスなスロー・ナンバー。

●Side 2

1．辛い別れ

『Broken Hearted Me』も提供しているランディ・グッドラムの作。アンの代表作であり、この曲で1978年度グラミー賞を獲得したベスト・セラー、ビッグ・ヒット。

抒情感あふれ、かつ説得力にみちたアンの歌声がひときわ輝く。恋はマインド・ゲーム、手さぐりの歯がゆさ、そんな思いを歌いあげている。

2．あなたとともに

ロック／ポップ女性歌手、キム・カーンズの作、1975年キム自身のアルバム『Kim Carnes』に収録、更には1978年ジーン・コットンとのデュオで発表、シングル・ヒットを記録した。

女心のいじらしさ、愛の深さを、心を込め切々と歌いあげたメロディの美しいスロー・ポップ・ナンバー。

3．強く抱いて

1968年に黒人歌手ジョニー・ナッシュによって作られ、彼自身の同名アルバムに収録発表された曲。

レゲエ・リズムをポップに、小ざっぱりとなめらかな明るい味付けにした作品。

4．テネシー・ワルツ

レッド・スチュワートとピー・ウィー・キングが1948年に作り、同年カウボーイ・コパスでレコーディング、1950年にはパティ・ペイジの歌で300万枚以上のレコード・セールスを記録したスタンダード・ナンバー。

〔かまち 潤〕

■DAMハイクオリティ・レコードについて

最近のデジタル・オーディオ技術とその周辺技術の急速な進歩で、ビデオ・ディスク及びコンパクト・ディスク（ＣＤ）の開発技術によって得られた製盤の技術とノウ・ハウを最大限に駆使し、従来のマスプロ的仕様とは性格の異なる、手作り的なプロセスを経て制作されたものが今回のＤＡＭレコードであります。

オーディオ・マニア諸氏はもちろんのこと、音楽ファンの皆様も年２回企画されているＤＡＭレコードについては、常に新しい試みがなされ、前向きな姿勢で技術的テクニックとそのトーン・キャラクターを追求し、より忠実な音楽の再現を制作ポリシーとしている意図を理解していただいていることと思います。

そこで今回のハイクォリティ・レコードの特徴を述べてみます。

レコード（フラット・ディスク）形状

一般レコード形状は、音溝部を保護する為にレーベル部とレコード周縁部にグルーブガードをほどこして、音溝部が直接に接触しない様に厚くなっております。これが一方では、レコード再生条件や音質への影響を考慮した場合必ずしも望ましい形状では無いようです。

例えばａ）グルーブガードの傾斜している溝部に再生針先が正規な溝壁面接触しないままトレースする為に、異状音の発生やノイズの発生原因となります。ｂ）ピックアップを下す時ヘタをすると、針先が滑って音溝部までジャンプする事もありキズの原因となります。ｃ）ピックアップによっては、カートリッジの底がグルーブガードに接触することもあります。ｄ）音質への影響としては、断面形状から解るように、ターンテーブル・シートと音溝部の密着性が悪くなり、レコード個有共振を起こしやすい状態にあると云えます。

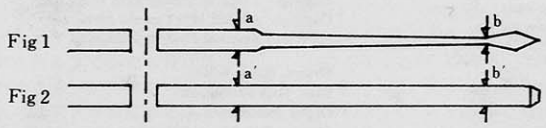

Fig 1　一般のレコード　a－b＝0.6〔mm〕
Fig 2　新フラットレコード（ディスク）a′－b′＝0.2〔mm〕

御存知のようにステレオ音溝は、水平振幅は左右信号の和（Ｌ＋Ｒ）、上下振幅は左右信号の差（Ｌ－Ｒ）として録音カッティングされており、特に本レコードのように通常のレコードより＋5dB程もハイレベルでカッティングされた複雑な音溝の再生は、より以上のカートリッジの振動エネルギーでレコード盤を烈振させ、レコードの個有共振によって音質への影響が充分に考えられます。

共振はマスとコンプライアンスの積で表わされますから、レコードの個有共振はレコードを厚く重くすることでマス成分を増して共振を下げ、更にレコード平面均一性の精度を上げ、フラット面に形状変更することでターンテーブル・マットとの密着性を大幅に改善し、共振によるレコードとターンテーブル・マットとの間に起こるリアクションを緩和させる事を可能にしました。これにより今までに無いサウンド・キャラクターが得られ、特に中域から低域の分解能を一段とクリアーにして、そのナチュラルな響きはよりオリジナル・サウンドに近いものと確信しております。

ターンテーブル及びターンテーブル・マットの材質、形状によっても音質の変化があるように、レコード形状、質量によっても音質へ影響するファクターは充分考えられますが、今回のこのレコードは特に再生条件を考慮した上で新フラットプロフィールを採用致しました。

一般レコードとの比較

重量比		30%up
厚さ比	最厚部	15%up
	最薄部	65%up

更に偏心の要因の１つであるセンターホールとプレーヤーのセンターピンとのガタについて注目し、先ず市販プレーヤーのセンターピン寸法を調査してその結果でレコードのセンターホールの設計変更を行い、最小限ガタツキを減らす為にセンターホールの径を小さい方向に持って行きました。

■クォーツ・ロック、厚手レコードについて

従来のシンクロナス・ダイレクト・モーターによる大振幅のカッティングでは、動的ワウ・フラッター（ダイナミック・ワウ）が少なからず音質に影響を及ぼしますが、今回の“DAM45”では、高精度にサーボされたクォーツ・ロックD.D.モーターとダイヤモンド・カッター針を採用することで、ディスク・マスタリング時に於けるクォリティーを高め、以前にまして余裕のある音溝巾と大振幅にたえられ、たっぷりとしたピッチとディプスがコントロールされるようになりました。

現在のレコードは再生系機能のグレード・アップに伴い、一段とＤレンジ、Ｆレンジ、及びリニアリティ等、大幅に飛躍しています。振幅（Ｐ-Ｐ）250μ～280μ、〔Ｌ-Ｒ〕、ピーク・レベル＋20dB程度のものは数多く高密度レコード化しております。このような高密度レコードの溝波形を完全にトレーシングする為に再生時の技術的ノウ・ハウ、及びそのテクニックがいろいろ考えられ、かずかずのオーディオ誌上でも論じられています。ヘッド・シェル、トーン・アームやターンテーブル・シートの共振問題等々……。たとえば、ターンテーブル・シートを例にとっても、ゴム、なめし皮、ガラス、金属等、変える毎にその音質の変化は確実に差があります。このように再生時の高忠実トレーシングはさまざまな問題が残されています。

それでは、ディスクそのものはどうかと考えますと、一時期、薄いレコードはプレスでの塩ビ成形性が良いとされ話題になりましたが、レコードを厚くする（質量を増す）ことでレコードの共振を下げ、更に再生時のレコードとターンテーブル・シートとの間に起る共振を緩和させることで、中音低域の分解能が一段とクリアーになり、特に深みの有る、伸びた重低音の再現とバランスされたダイナミックなパワー感を充分にお楽しみ下さい。

この種のレコードは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来からのプロフェッショナル・レコードで開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定性効果の高い安定剤の組合せにより、一層ゲル化性の改善を図り、また更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果ともあいまって極めて安定度の高い、この厚手レコードが生まれ、リアリティーの良いダイナミック・レンジをもつオリジナル・サウンドの再現を可能にしました。

30センチ45回転レコードの取扱いについて

このレコードは、通常の33⅓回転レコードと変った点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

(1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ますが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。

(2)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33⅓回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意をして下さい。

(3)再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますのであらかじめ室温を15℃～20℃位に保って下さい。

(4)再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧（メーカー指定の重い方にセット）には充分気を付けて下さい。

(5)このレコードは、ハイクォリティーのオーディオ・チェック・レコードのため、カートリッジによってはトレースがむずかしい場合があります。

レコード材質――プロユース材料使用

●カッティング・データ

Cutting : TOSHIBA-EMI Cutting Room
Cutting Date : May. 10. 1983
Tape Recorder : Studer A-80 MKII
Drive Amp. : Neumann SAL-74
Cutting Lathe : Neumann VMS-80
Cutting Head : Neumann SX-74
Diamond Cutting Stylus
Non Limitter
Non Equalizer
Cutting Engineer : S. Takeuchi

Produced by : Jim Ed Norman for JEN Productions
Executive Producer : Balmur Ltd.
Engineered by : Ken Friesen
Assisted by : Peter Holcomb
Recorded at Eastern Sound, Toronto
Mastered by : Ken Perry

企画：第一家庭電器株式会社
製造：東芝EMI株式会社